

第三章 朱雀院の物語 女三の宮の裳着と朱雀院の出家

[第一段 歳末、女三の宮の裳着催す]

年も暮れぬ(年も暮れました)。朱雀院には(朱雀院に於かれては)、御心地なほ*おこたるさまにもおはしまさねば(御加減が未だに持直す様子にもいらっしゃらないので)、よろづあわたたしく思し立ちて(何事もせつかに思い立ちなさって)、御裳着のことは(三の宮の御裳着のことに ついては)、思しいそぐさま(その準備の形様は)、来し方行く先ありがたげなるまで(先例にも後世の手本にも他に無いほどに)、いつくしくののしる(盛大で大掛かりです)。 *「おこたる」は「怠る」でく怠ける、過失を犯す>という現代語でもあるが、原義に<緩む、弛む>や<停滞する>などの語感があるのだろうか、古語辞典に<病状が快方に向かう>という言い方も説明がある。

御しつらひは(裳着会場の設営は)、*柏殿の西面に(柏殿の西向きの部屋に)、*御帳(垂幕や)、御几帳よりはじめて(間仕切り几帳をはじめ)、*この綾錦混ぜさせたまはず(国産の綾織物は一切お使いなさらず)、唐土の後の飾りを思しやりて(唐の後の部屋飾りを標榜して)、うるはしくことごとしく(美しく豪華に)、かかやくばかり調へさせたまへり(輝くばかりに御用意あそばしました)。 *「柏殿」は「かへどの」と読みがあり、大辞泉に<平安時代、朱雀院(すぎくいん)にあった皇后の御所。>とある。五年前のことだが少女卷七章二段に、今上帝が朱雀院行幸の際に源氏大臣ともども弘徽殿大后を院内の居室に見舞った、という記事が在ったが、その時も大后の居室が柏殿との明示は無かった。また三年前の記事には、初音卷三章一段に男踏歌一行が「朱雀院の後の御方などめぐりけるほどに夜もやうやう明けゆけば」とあって、其処の注釈に<弘徽殿大后は朱雀院の院内にある柏梁殿にいた>と解説されていたが、その出典は明かされていなかった。もしかすると、朱雀院の建築考証と相俟って、この「柏殿」という固有名詞の使用がそれらの根拠なのかも知れない。ところで、大后は既に亡くなっているようなので、今は誰が住んでいるのだろうか。有明尚侍だろうか。それに、「にしおもて」を会場にしたということは、「柏殿」は朱雀院本殿に対して東の別棟または東の対屋だったに違いない。 *「帳(ちゃう)」は<とぼり、垂帷>。 *「このあやにしき」は<日本製の綾織物>、とのこと。当時は圧倒的に大陸製が先進品だったらしい。

御腰結には(腰結役には)、太政大臣をかねてより聞こえさせたまへりければ(院は太政大臣をかねてから指名申しなさっていたので)、*ことごとしくおはする人にて参りにくく思しけれど(藤原殿は政治的な立場をお考え為さって右家筋の朱雀院行事で主たる役目を務めることに六条院に遠慮して参列しづらくお思いだったが)、院の御言を昔より背き申したまはねば(院の御下命を昔から反論し申しなさらないので)、参りたまふ(参列なさいます)。 *「ことごとし」は<物々しい、おおげさだ>と古語辞典にある。そしてこの文を、渋谷訳文は「物事を大げさになさる方なので参上しにくくお思いであったが」としてあり、与謝野訳文は「もったいぶったこの人は気は進まないままで」としてある。私の渋谷訳文での印象は、藤原殿が王家の裳着を畏れ多く思って、縁戚でもない一臣下たる自分が腰結役を務めることに遠慮して「参上しにくく(参りにくく)」思った、という文意だ。一方、与謝野訳文は「参りにくく」を<気が進まないで>としてあり、「ことごとし」を<もったいぶった>と読んである。私は最初、身分制度の建前からいって、王家儀式への参列を臣下が遠慮する、というのは分かり易く思えて、この「参りにくく」を謙遜と取って渋谷訳文に従う気で居た。それには、此処までの婿選びの話が朱雀院目線の身分価値観で述べられて来ていた所為も有ったのかも知れない。が、何となく腑に落ちずに、念の為に「にくし」を古語辞典で当たると、「難し(困難だ)」よりは「憎し(気に

入らない、煩わしい、厭だ)」という語感が先に来る。「難し」の客観的な言い方には「かたし」がある。であれば、むしろ与謝野訳文に従うべきか。しかし、藤原氏の尊大さばかりを言う、というのも少し違和感がある。そこで、藤原氏目線で考え直してみると、朱雀院は基本的に右家筋だ。藤原殿も右家の四の姫を妻にはいるが、政治的な立場は六条院寄りの左家の筆頭だ。源氏殿の須磨流離の際にも藤原殿は右家の冷視を顧みずに、須磨へ見舞いに向いたほどだ。藤原殿が遠慮するのは、むしろ六条殿への手前、朱雀院寄りになる外形を恐れた、のかも知れない。ただ、現下の権威は今上帝が六条院を厚遇しているが、次期帝である皇太子は朱雀院の御子なので、藤原殿が政治実勢を将来的に維持しようとするれば、朱雀院への擦寄り避けられない。そして、朱雀院にとっても、現有勢力である藤原左家に祝儀支持して貰わないと、三の宮の実質格上げが図れず直近の婚儀への環境作りが整わない。両者の思惑が一致した。そういう政治的な記事、というより実相を物語っている、と読みたい。

今二所の大臣たち(もう二人の左右大臣たちや)、その残り上達部などは(その他の上層部の高官たちは)、わりなき障りあるも(万障繰り合わせて)、あながちに*ためらひ助けつつ参りたまふ(強いて病状を気付手当で隠してまでも参列為さいます)。*「ためらひ」は<躊躇>ではなく<小康←(病気の)停滞>、ということらしい。「おこたり」が<病状の快方→回復傾向>であるのに対して、「ためらひ」は<一時的な取り繕い>という語感。「助く」は<手当とする、応急処置する>。

*親王たち八人(院の御子息が八人)、殿上人はたさらにもいはず(殿上身分の役人はまた言うまでもなく)、内裏(うち、帝や)、春宮の(とうぐうの、皇太子の名代が)残らず参り集ひて(残らず参列に集まって)、いかめしき*御いそぎの響きなり(大勢の来客に接待準備を整えた院挙げての盛大な儀式の様相なのでした)。*「みこたちはちにん」は全員が男で、院の子息なのだろうか。女は四人とあって、三の宮の他に三人居る筈だが、その他に男子が八人と更に東宮が居た、のだろうか。物語上は大した問題では無いのかも知れないが、折角に数を上げたのなら説明が欲しい所だ。*「いそぎ」は<準備、したく>とあるが、大勢の客のための<接待準備>のことなのか、式自体の手順運びの為の<道具類の用意>なのか、式次第の<人員確認>なのか、その全てなのか、さっぱり分からない言い方だ。「ひびき」は<評判が立つ>で、物入りに伴う仕入れの多さに世間で催しの盛大さが評判になる、ということかも知れないが、「鳴響く、轟く」などの語感からすれば、式自体が大勢の客で賑わった、という文意も成立するように見える。とても分かり難い文だ。しかし、当時の読者にはこういう言い方で特定の具体的な事柄が理解出来た筈で、またはは裳着当日の描写なのだから、事前の準備や事後の評判というよりも、「いかめし」の説明が「御いそぎの響き」と読みたい。

院の御こと(この朱雀院主催の御儀式も)、このたびこそ*とぢめなれと(この度こそが最後なのだろうと)、帝、春宮をはじめたてまつりて(天皇や皇太子をはじめとし申し上げて)、心苦しく聞こし召しつつ(お力添えをお考えなさって)、*蔵人所、納殿の唐物ども(院と姫に実際に役立つ最新の輸入品を)、多く奉らせたまへり(数多く御贈り上げあそばしました)。*「とぢめ」は動詞「閉ぢむ(切りをつける)」の連用名詞と古語辞典に説明され、<切りをつけること→是で最後にすること>からの展開で<物事の終り、人の臨終、葬儀>を意味するらしい。ただ、「閉づ(閉じる、閉じこもる)」の連用名詞に「目(点、しるし)」の付いた言葉でもありそうで、その混同や混用はある気がする。*「くらうどころ」は天皇の日常の庶務や事務を司る蔵人の詰所という言い方だが、その場所は清涼殿の南隣の校書殿(けうしょでん)の西廂にあり、その校書殿の母屋は文殿(ふみどの、書庫)と納殿(をさめどの、調度備品庫)になっていたらしい。此处での「蔵人」は「校書殿」ないし「文殿」のこと、と読んで置く。なので、この「蔵人所、納殿の唐物ども」とは装飾品としての宝物ではなく、実用性のある最新の輸入品としての書物や道具類であり、帝が正しく身内として使用実感を持った上で選んだ最上

の役立つ品々が朱雀院と姫宮に奉られた、ということなのだろう。雲上世界ながらも親身さを窺わせる生活感がこの「からものども」という語にあるようで、ちょっと和む。

六条院よりも(六条院からも)、御とぶらひいと*こちたし(御祝品が言尽くせないほど多くあります)。贈り物ども(贈り物の内)、人びとの禄(参加者への記念品や)、*尊者の大臣の御引出物など(主賓の藤原殿への引き出物などは)、かの院よりぞ奉らせたまひける(六条院から差し上げあそばしたのです)。*「こちたし」は「事痛し、言甚し」などと表記され<甚だしい、多い、煩い、ひどい、仰々しい>と必ずしも意味は肯定的でもない。ただ、「いたし」は「痛し」も「甚し」も「致す(至す、至らしめる、限りを尽くす)の連用名詞と語源を一にするようで、「言至し」は<言い尽くす>の語意が語感上で<言い尽くせたものではない>に転じたもの、のように私には感じられる。などと、くどくどとノートするのも、この語はこの物語でも何度使われているが、私には今一、馴れない語感があって、特に「いとこといたし」という「いたし」の重複は、それこそ話し手の気持ちは分かるが、という言い方に思えて、実物があったり、テレビリポートのように画像があったりすれば説得力はそれなりにあるものの、この架空話には何ともそぐわない気がしてしまうからだ。いや、これも当時の宮廷読者にとっては、この言い方で実際の場面が想定出来て、臨場感を感じたのかも知れない。とすると、どう言い換えても肉薄は出来ないワケだ。*「そんじゃ」は<尊い人=主客・主賓>で、注には<当儀式において腰結の役を勤めた太政大臣をさす。>とある。祝儀式場での引出物が主催者からではなく他家から与えられるというのは私には分かり難いが、此处ではそういう下話が成立していたものとして、わざわざこの記事がある意味は前の「ことごとくおはする人にて参りにくく思しけれど」という藤原殿の懸念に呼応して、源氏殿も藤原殿の立場を認めているという説明なのだろう、と私は読んだ。

[第二段 秋好中宮、櫛を贈る]

*中宮よりも(中宮からも)、御装束(姫宮に御着物や)、櫛の筥(化粧道具箱を)、心ことに調ぜさせたまひて(特別にお揃えあそばして)、*かの昔の御髪上の具(かつての伊勢下向で賜わったツゲの櫛を)、ゆゑあるさまに改め加へて(華やかな娘用に飾り加えて)、さすがに元の心ばへも失はず(然り乍ら元の院の志しの出来栄えも失わず)、それと見せて(その趣の風合いも残して)、その日の*夕つ方(裳着当日の式に先立つ夕方に)、奉れさせたまふ(お届け下さいます)。*「中宮」は注に<冷泉帝の秋好中宮。>とある。が、「あきこのむ」は六条院での春秋争いに拠る呼称かと思うので、今上帝の皇后としては不相応であり、むしろ「梅壺中宮」の方が私には妥当に思える。ただ、普通の文脈で「中宮」とだけ言えば、今上帝の今上中宮を指す、ということにはなるのだろう。*「かの昔の御髪上の具」は賢木卷一章五段の齋宮の伊勢群行の際に、時の朱雀帝が「別れの櫛たてまつりたまふ」たもの、のようだ。普通、贈り物を返すのは破局を意味するが、今の中宮は時に「齋宮は十四にぞなりたまひける」(賢木卷一章五段)とあり、今から、16年前のことであり、今上帝に入内したのも8年前(総合卷一章一段)であって、今になって、その「別れの櫛」を今風に飾り直して三の宮に贈るというのは、母子伝承の趣さえある。三の宮の母御は他界しており、遺児である姫宮に中宮が院から授かった櫛を与えるというのは、あたかも三の宮を院と中宮の子に準えて見做す、という意味合いが含まれる。即ち、中宮は院の好意を齋宮の時から受け止めていた、という打ち明けになるのであって、是で鞆丸が疼かない男の居る筈も無いというほどの濃厚な艶出しだ。*「夕つ方」は「その日」とあるので、裳着に先立って裳着の髪上げ用に届けられたのだろう。裳着が深夜に行なわれるのは、行幸卷三章四段に「亥の時にて入れたてまつりたまふ」と対の姫の裳着場面で描写されていた。

宮の権の亮(みやのごんのすけ、中宮職の特命次官で)、院の殿上にもさぶらふを御使にて(朱雀院のお側にも出入りしていた者を中宮は使者に立てて)、姫宮の御方に参らすべくのたまはせつれど(姫宮の御部屋にお届けするように仰せになったが)、かかる言ぞ(このような歌が)、中にありける(祝儀品の中にありました)。

「さしながら昔を今に伝ふれば、玉の小櫛ぞ神さびにける」(和歌 34-01)

「今は昔のこの櫛を、ずっと大事にしました」(意識 34-01)

*注にく秋好中宮から朱雀院への贈歌。「さしながら」はそのままの意と「髪に挿しながら」の両意を掛けた表現。二人の共有する過去を回想し、また、姫宮の成長を讃えて、遠い昔の事となってしまったことを懐かしむ。親愛の情をのべた歌。>とある。「そのままの意」とは<「そのまま(然乍、そっくり、丸々)」の意>ということだろうか。だとすれば、とりあえず「そのまま」を括弧で括るべきだ。それとも、「そのままの意」で<差し当たって→この度に際して>の意、ということだろうか。どちらにしても、とても不親切で、不適切な注だ。「伝ふ」は<伝承する>であり<言い伝える>でもある。「さしながら昔を今に伝ふれば」は、一意にく昔の櫛を今の姫にそのまま伝承すれば>であり、また一意にくこの裳着に際して昔の気持ちを今に語れば>である。その複意で「髪に挿しながら(私が挿していたものの、私は挿したままで)」だから、「玉の小櫛ぞ(たまのをぐしぞ、大事な宝物のこの櫛は)」の「ぞ」が効いて、「かんさぶ(厳かになる、老ける)」という述辞が<(私が挿すよりも姫宮が挿すことでこの櫛が)神々しさを増す>という賛辞の歌筋と<(長い間頂いた御気持ちのままに櫛を挿して来て私も年を取ったので)二人の思い出は昔話になった>という懐かしさの洒落つ気を込めた自嘲の歌筋とになる、に違いない。

院、御覧じつけて、あはれに思し出でらるることもありけり(院はその櫛を御覧になって青春の日が懐かしく思い出されなさることもありました)*あえ物けしうはあらじと譲りきこえたまへるほど(姫宮の祝い品として不都合は無いだらうと中宮が譲り申しなさるものだが)、げに、おもだたしき簪なれば(実に光栄な贈物の髪挿しなので)、御返りも(朱雀院から中宮への御返歌も)、昔のあはれをばさしおきて(昔の恋情には触れずに)、 *「あえもの」は「肖物」と表記され、「肖ゆ(あゆ、あやかる・好ましいものをかたどる・似せる)」の連用名詞に「物(物体)」を付けた<似せた物、あやかり物、縁起物>くらいの言い方だが、あくまで祝い品として、ではある。

「さしつぎに見るものにもが、万世を黄楊の小櫛の神さぶるまで」(和歌 34-02)

「あなたの髪にあやかって、神に願いを祈ります」(和歌 34-02)

*注にく朱雀院から秋好中宮への返歌。「さし」「櫛」「神さび」の語句を受けて返す。唱和の歌。「さしつぎに」はあなたの幸運に引き続いてわが姫君の幸運を、の意。「もが」終助詞、希望の意。「つげ」は「黄楊」と「告げ」の掛詞。「万世」「神さぶる」いずれも姫君の幸福を願う気持ち。>とある。「もが」は<モダンガールの略>だといいなあ、と思うほど、現代語へのつながりが読み難い古語で<～だったら良いなあ>と古語辞典で説明される。また、「もが」の用法は<上の事柄の存在・実現を願う意を表す(大辞泉)>終助詞と明記されているので、此处で前節とし「よろづよを」を後節として、この歌は(5・7)+(5・7・7)と読むべきらしい。しかし、「見る者にもが万世を」という文の方が<この愛娘にも末永い幸せが(ありますように)>と現代語に読み下し易い。そして、恐らくこの文はその好例で、「もが」を願望を示す終助詞と解するよりは、下に付くべき「あらむ、ありせむ」などが<言わずもがな>で省略された慣用文体の、列挙の係助詞「も」に対象指定の格助詞「が」が付いた普通の語用、と私は取

ってみたい。尤も、それでも、ツゲの櫛が万年をツゲるほど古くなるまで末永い幸運を、という歌筋はダジャレにしか聞こえないが、是も親の真心と信じて、決してオヤジギャグではないと思いたい。

とぞ祝ひきこえたまへる(とのように三の宮への祝言をお詠みなさいます)。

[第三段 朱雀院、出家す]

御心地いと苦しきを*念じつつ(朱雀院はお加減がとても優れないのを我慢して)、思し起こして(奮起して)、この*御いそぎ果てぬれば(この姫宮の御成人式が終わったので)、三日過ぐして(三日後に)、つひに御髪下ろしたまふ(遂に出家なさいました)。 *「念ず」は<心に祈る、思い願う>でもあるが、一念を貫いて<他事に動じない、耐える、堪える、我慢する>でもある。 *「いそぎ」という語に<儀式一般>を示す意味は無いようだ。「いそぎ」は<用意、準備>と古語辞典にある。しかし、此处での語用では「いそぎ」が<裳着式>を指しているのは文脈上明らかだ。だから、「裳着式」だけに<成人になる用意を整えた>という意味の「いそぎ」という語用だと取ることにする。

よろしきほどの人の上にてだに(そこそこの身分の人の場合でも)、今はとてさま変はるは悲しげなるわざなれば(いよいよ俗世を離れる剃髪姿になるのは万感胸に迫ることなので)、まして(まして退位なさった前の帝であれば)、いとあはれげに御方々も思し惑ふ(大勢の御妃様方も院が御籠もりなさることに、とても感慨深げに寂しく御思い為さいます)。

*尚侍の君は(ないしのかんのきみは)、つとさぶらひたまひて(ぴったりと院のお側に付いていらして)、いみじく思し入りたるを(自身も後追出家しようかと、非常に思い詰めていらっしやるのを)、*こしらへかねたまひて(院はなだめかねなさって)、 *「尚侍の君」の読みは「かんのきみ」ではなく「ないしのかんのきみ」と略さずに振ってある。というか、どちらのカナ表示でも同じ「尚侍の君」となることが紛らわしいのかも知れない。 *「こしらふ」は<なだめる、とりなす、取り繕う>と古語辞典にある。

「子を思ふ道は限りありけり(子を思う気持ちは成長を祝うことで示すことが出来る)。かく思ひしみたまへる別れの堪へがたくもあるかな(しかしあなたの、このように思い込んでいらっしやる別居が堪えがたく悲しくなります)」

とて、御心乱れぬべけれど(御決心も揺らぎそうだが)、あながちに御脇息にかかりたまひて(そのままじっと脇息に寄り掛かりなされたままで)、*山の座主よりはじめて(延暦寺管長をはじめ)、御忌むことの阿闍梨三人さぶらひて(院の剃髪を行なう高僧の三人が近侍して)、*法服などたてまつるほど(法衣などをお着せ申し奉るといふ)、この世を別れたまふ御作法(出家の御作法は)、いみじく悲し(非常に趣深い)。 *「やまのざす」は比叡山延暦寺の天台座主、とのこと。また、「おんいむことのあざりみたり」は天台座主を含めて<『完訳』は「戒を受ける師主、作法を教える教授師、戒場で作法を行う羯磨師の三人」と注す。>と注にある。「羯磨師」は「こんまし」と読むらしい。「教授師」も「羯磨師」も古来の印を切ったり、古インド原語で呪文を唱えたりするのだろうか。だとしたら、そういう独特な所作技法を知っている者が専門家ぶるといふのは、弁護士が法文引用で出典番号を挙げるのと同様に尤もらしい体裁を付けるだけで、実際は定型化した業務を暗記しているだけの処理技術に過ぎないという底の浅さを思わせる。そんなものは、その地位にある有資格者が事態収拾を執行するという権威主義の実態であって、本質とは別の文化情緒だ。医師にしても法務実務者にしても、技術者は技術・技法の研鑽こそが使命であり、実際の診立てや施術や所作や話法が芸域にまで達し

ていれば其自体に価値もあるが、それも含めて当事者の問題解決に努めてこそその資格貸与だ。それは身分とは別概念で、特権身分は平安期なら家柄で、現代日本では選挙だけで認められる。何れにせよ、資格で権威を振りかざすなど、身の程知らずの猿芝居というものだ。尤も、是は私が「山の座主」の価値を知らないがゆえに受ける感想で、朱雀院自身は自らが権威付けして遣った座主に仕えさせるという形に満足していた、ということは在るのかも知れない。が、そんな雲上世界ならではの気持様など、庶民が決して手出しするものじゃない。「忌む」は<受戒する>、即ち<剃髪する>。 *「法服」は「ほふぶく」と読みがある。袈裟、法衣。

今日は(この日は)、世を思ひ澄ましたる僧たちなどだに(悟りきった僧たちでさえ)、涙もえとどめねば(涙も堪えられないのだから)、まして女宮たち(をんなみやたち、内親王たちや)、女御、更衣、ここのら男女(使用人の大勢の男女の)、上下ゆすり満ちて泣きとよむに(身分の上下に関わらず皆肩を揺らして泣きどよめくので)、いと心あわたたしう(院はとても気分が落ち着かず)、かからで(このようにではなく)、静やかなる所に(静かな御堂で)、やがて籠もるべく思しまうける本意違ひて思し召さるるも(そのまま読経生活に籠もろうと予定なさっていた本意と違うと御思い為さるるも)、「ただ(偏に)、この幼き宮にひかされて(この三の宮が気懸かりで)」と思しのたまはず(と思ひ仰います)。

内裏よりはじめたてまつりて(帝をはじめもうし奉って)、御とぶらひのしげさ(御出家見舞いの多さといったら)、いとさらなり(大変なものでした)。

[第四段 源氏、朱雀院を見舞う]

六条院も(六条院源氏殿も)、すこし御心地よろしくと聞きたてまつらせたまひて(朱雀院が少し御加減がよろしくあらせられるとお聞き申しあそばされて)、参りたまふ(お見舞いに参上なさいます)。

御賜ばりの御封などこそ(おんたうばりのみぶなどこそ、六条院が朝廷から賜わった歳入物資などこそ)、皆同じごと(朱雀院同様に)、下りゐの帝と等しく定まりたまへれど(退位された帝と同額同量と定まっていたが)、まことの太上天皇の儀式にはうけばりたまはず(実際に帝を退かれた上皇の基準様式ほど格式張っては振舞いなさいません)。

世のもてなし思ひきこえたるさまなどは(世間が六条院に寄せる尊敬の様子は)、心ことなれど(格別だったが)、ことさらに削ぎたまひて(源氏殿はあえて簡素になさって)、例の(いつもの)、ことごとしからぬ*御車にたてまつりて(飾り立てていない牛車にお乗りあそばして)、上達部など、さるべき限り(上流貴族の近しい者だけが)、*車にてぞ仕うまつりたまへる(馬上で武威を張らず車で付き従いなさいました)。 *「おんくるま」が注に<『完訳』は「太上天皇の御幸には檳榔毛の車を用いるのを常とした」と注す。>とある。「檳榔毛の車」は「びらうげのくるま」は<牛車(ぎっしゃ)の一。白く晒(さら)した檳榔の葉を細かく裂いて車の屋根形をおおったもの。上皇・親王・大臣以下、四位以上の者、女官・高僧などが乗用した。びろうぐるま。びりょうのくるま。>と大辞泉にある。なお、「ピロウ」については<ヤシ科の常緑高木>で<古代天皇制においては松竹梅よりも、何よりも神聖視された植物で、公卿(上級貴族)に許された檳榔毛(びらうげ)の車の屋根材にも用いられた。天皇の代替わり式の性質を持つ大嘗祭(だいじょうさい)においては現在でも天皇が禊を行う百子帳(ひやくしちょう)の屋根材として用いられている。>と Wikipedia にあ

る。また、「檳榔(びんろう)」は「ピロウ」とは別のヤシ、とのこと。 *「車にてぞ」は注に『完訳』は「供奉の公卿。馬で供奉するのが常であるという」と注す。>とある。武威を誇らない、と取る。

院には(朱雀院に於かれては)、いみじく待ちよろこびきこえさせたまひて(非常に歓待申しなさって)、苦しき御心地を思し強りて(病苦を押して)、御対面あり(御対面があります)。うるはしきさまならず(整然と用意された客間ではなく)、ただおはします方に(御自分の居室に)、御座よそひ加へて(御座を一つ加えて)、入れたてまつりたまふ(源氏殿をお入れ申しなさいます)。

変はりたまへる御ありさま見たてまつりたまふに(源氏殿は院が剃髪姿で、お変わりになったお姿を拝し申しなさって)、来し方行く先暮れて(過去の栄光も未来への希望も墨色一色に暮れたようで)、悲しくとめがたく思さるれば(悲しさに涙を止められなく思えなさって)、とみにもえためらひたまはず(直ぐには落ち着きなされません)。

「故院におくれたてまつりしころほひより(故院に先立たれ申した頃から)、世の常なく思うたまへられしかば(世の無常が思われまして)、この方の本意深く進みはべりにしを(わたしもこうした出家の願望を深く持つばかりでしたが)、心弱く思うたまへ(決心が付かず)たゆたふことのみはべりつつ(ためらってばかりいて)、つひにかく見たてまつりなしはべるまで(ついに兄上をこのような御姿に拝し申し上げるまで)、おくれたてまつりはべりぬる心のぬるさを(遅れを取り申してしまった気持ちの甘えを)、恥づかしく思うたまへらるるかな(恥づかしく存じられるところです)。

身にとりては(自分にとっては)、ことにもあるまじく思うたまへ(たいしたことでもないと思われ)たちはべる折々あるを(出家を思い立つ折々はありましたが)、さらにいと忍びがたきこと多かりぬべき(それでも離俗入道するにはとても見捨てられないことが多く在るような)わざにこそはべりけれ(事情というものが御座いまして)」

と、*慰めがたく思したり(自身はまだ出家できないとお考えになりました)。 *「なぐさむ」はくなどめる、とりなす、気を紛らす>だが、「慰め奉り」ではないので、之は源氏殿が朱雀院をくなくさめる>のではなく、源氏自身が<癒す→納得して落ち着く>ということなのだろう。で、源氏自身が<癒える・落着く>というのは、兄院の出家姿を前にしているのだから、自分も<出家すること>なのだろう。

[第五段 朱雀院と源氏、親しく語り合う]

院も、もの心細く思さるるに、え心強からず(院も体調の悪さに先が長くなく思えて心細い気分で)、うちしほれたまひつつ(涙がちに)、いにしへ、今の*御物語(昔や今の事柄でお思いになるところを)、いと弱げに聞こえさせたまひて(とても弱弱しい声でお話しなさって)、 *「ものがたり」は単なる事の羅列ではなく、一つの話題各々がどんなに短い話だとしても、いろいろな出来事に対して何らかの筋らしい考え方に基づく寸評・論評などを含む纏まった話、なのだろう。

「今日か明日かとおぼえはべりつつ(今日明日にでも出家しようと思いつつ)、さすがにほど経ぬるを(そのまま時が経ってしまうのを)、うちたゆみて(油断して)、深き本意の端にても遂げずなりなむこと(念願の修行生活の一端も遂げずに死んでしまつては)、と思ひ起こしてなむ(と

思っこの度決心したので)。

かくても残りの齡なくは(このように坊主姿になっても余命が無ければ)、行なひの心ざしも叶ふまじけれど(念仏修行による後縁の救済も叶わないだろうが)、まづ*仮にても(世俗を離れて、取り敢えず少しでも)、*のどめおきて(雑事に追われずのんびりしておいて)、念仏をだにと思ひはべる(念仏だけでも唱えようと思っています)。 *「かりにても」は<一時的にせよ、不十分でも、僅かでも、少しでも>。だから、「まづ」は<ともかくも、取り敢えず>。 *「のどむ」は<のどかにする、ゆっくりする、猶予を持つ>。

はかばかしからぬ身にても(無能な私でも)、世にながらふること(今まで生き永らえているのは)、ただこの*心ざしにひきとどめられたると(ただこのお勤めを果たす目的があつてこそこの世に引き止められているものと)、思うたまへ知られぬにしもあらぬを(存じられなくも無いのですから)、今まで勤めなき怠りをだに(今まで勤行を怠ってきたことが)、安からずなむ(不安だったのです)」 *「こころざし」は此処では<目的、使命>だろう。

とて(どのように)、思しおきてたるさまなど(出家した事情などを)、詳しくのたまはするついでに(詳しく仰った後で)、

「女皇女たちを(をんなみこたちを、女の子たちを)、あまたうち捨てはべるなむ心苦しき(世話し切らずに居るのが気懸かりです)。中にも(中でも)、また思ひ譲る人なきをば(出家に際して改めて世話を任せる人がいない三の宮が)、取り分きうしろめたく(取り分け心残りで)、見わづらひはべる(苦慮しています)」

とて、まほにはあらぬ御けしき(真正面からは仰らない朱雀院の御態度を)、心苦しく見たてまつりたまふ(源氏殿はお助け申したくお思いになります)。

[第六段 内親王の結婚の必要性を説く]

御心のうちにも(源氏殿は御自身のお気持ちの中にも)、*さすがにゆかしき御ありさまなれば(その兄院の御態度から改めて三の宮が興味深い御事情なので)、思し過ぐしがたくて(聞き捨てならず)、 *「さすがに~なれば」は<そうであっても他に~という重要な事情があるので>という言い方にも見えるが、この「さすがに」には<そうであっても>と逆接句で受けるべき前提事情が示されていない。尤も、左中弁から知らされた三の宮との婚儀の朱雀院の内意を、源氏殿は「ただ内裏にこそたてまつりたまはめ」(二章八段)と結論付けたのだから、本来は受けるべきではないと判断していた、という事情は文脈上は有るとは言えるのかも知れないし、注にある<源氏は女三の宮が藤壺の姪に当たる人なので聞き過ぎすことができない。>という意味合いを読者は各自なりに感じ取ってはいるとも思うが、では、その事情を此処に補語出来るかと言えば、それはサスガニ強引な読み方だ。其処まで先読みをしてしまったら、作者がわざわざこの段取りを述べている甲斐がない。つい少し前にもノートしたが、この「さすがに」は副詞ではない。「さ」は上記の事柄を示す指示代名詞。「す」は事態推移の動詞。「が」は逆接の接続詞。「に」はその「さすが」という逆接条件の<状態に於いて>を示す格助詞。だから、上記の事柄とは朱雀院の「まほにはあらぬ御けしき」であり、その発言内容と心痛そうな態度から、改めて三の宮との

婚儀を源氏殿が考えてみようかと思った、と読まなければ作者の工夫を損なう。その源氏殿の底意にく女三の宮が藤壺の姪に当たる人>という要素が絡んでいた、と読むのは読者の勝手だろうが。

「げに(確かに)、ただ人よりも(臣下よりも)、かかる筋には(内親王には)、*私さまの御後見なきは(同族身内の御世話人が居ないのは)、*口惜しげなるわざになむはべりける(具合が悪い事情かと存じます)。*「わたくしさま」は<身内の者>。即ち、同類の王族縁者。*「口惜しげなるわざ」は<不都合な事情>だろうが、是は主人格たる王族が使用人である臣下筋に庇護されるという一般的な立場の無さ、というよりは、実際に具体的に藤原氏の長者以外の二番手以下の家柄では、その権威に象徴性が無く、実力即ち懐加減で地位の優劣が量られるという現実には姫宮が直に曝される、という厳しい事情を言っているのだろう。王族なら、実際には然して金回りが良くなくても、あくせくしない質素な暮らしぶりが好みの様式なのだとおぼえていけば、それ以上、少なくとも面と向かっては軽んじられることはなく、品の良い文化人の体裁を保てるが、平民は高価な文化財を身に付けなければ文化人と見做されない。極端な場合には、姫宮自身が文化消費財になってしまう。

春宮かくておはしませば(姫宮の兄宮はりっぱな皇太子でいらっしゃるので)、いとかしこき末の世の儲けの君と(それは畏れ多い末世に得難い貴重な若君と)、天の下の頼みどころに仰ぎきこえさするを(天下世間が頼り甲斐があると期待申し上げます)。まして(さらに兄上が)、このことと聞こえ置かせたまはむことは(姫宮の面倒を皇太子に申し送りなされたなら)、一事として疎かに軽め申したまふべきにはべらねば(どんなことでも疎かに軽んじなすることはありませぬので)、さらに行く先のこと思し悩むべきにもはべらねど(そんなに先行きのことを思い悩みなさることはないでしょうが)、げに(確かに)、こと限りあれば(物事には限度がありますから)、公けとなりたまひ(即位なされば)、世の政事御心にかなふべしとは言ひながら(政治向きのことが思い通りにお出来きになるとはいうものの)、女の御ために(妹宮の為に)、何ばかりの*けざやかなる御心寄せあるべきにもはべらざりけり(どれほどの行き届いた御配慮があるのかは分かりませぬ)。*「けざやかなるみこころよせ」は<はっきりと効果が分かる御助力→有効な御尽力>。

すべて(一般に)、女の御ためには(女御子の御安泰の為には)、さまざま真の御後見とすべきものは(それぞれまことの御世話を頼るべきは)、なほ*さるべき筋に契りを交はし(やはり御所に婚姻関係を結んで)、え*さらぬことに育みきこゆる*御護りめはべるなむ(朝廷の義務として御世話申し上げるお役目の者が居るとするのが)、うしろやすかるべきことにはべるを(安心できることなのですが)、なほ(それでも)、しひて後の世の御疑ひ残るべくは(どうしても先行きにご懸念が残るようでしたら)、*よろしきに思し選びて(その姫宮にとって良さそうな相手を院がお考えになって)、忍びて(内々に)、さるべき御預かりを定めおかせたまふべきになむはべなる(適切な御預け先を決めて置きなさるべきかと存じます) *「さるべき筋に契りを交はし」は注にくしかるべき夫婦の契りを交わすこと、結婚の意。>とある。が、「さるべき筋」は<しかるべき夫婦になるように>だろうか。「すぢ」は<血筋>だろう。だから、「さるべき筋」は<王家血筋>だが、この王族会議の場面で言葉を濁す「さるべき筋」は<今上帝>に違いない。*「さらぬ」は「避けぬ」で<避けられない、逃れられない>。*「まもりめ」は<守る役目の人、番人>と古語辞典にある。*「よろしきに思し選びて」は注に<適当な人物をお選びあそばして>の意とある。「よろしきに」を<適任者に>と取れば、「思し選びて」は<選び定めて>になるのだろう。が、「よろしきに」を<姫の為に>と取れば、「思し選びて」は<よく考えて>になりそうだ。

と(と源氏殿は)、奏したまふ(朱雀院に言上申しなさいます)。

[第七段 源氏、結婚を承諾]

「さやうに思ひ寄る事はべれど(そのように姫宮の入内を考えたこともありませんが)、それも*難きことになむありける(そうも行かないようなのです)。いにしへの例を聞きはべるにも(昔の例を聞きまして)、世をたもつ盛りの皇女にだに(在位中の娘御子でさえ)、人を選びて(臣下から婿を選んで)、さるさまのことにしたまへるたぐひ多かりけり(婚儀を結びなされる場合が多かったのです)。*「かたきこと」は<出来ないこと>。だが、その説明は無い。で、全くの一般論だが、王家の歳費は国家予算で賄うのであり、帝が王族から妻を迎えれば朝廷は一方的な持ち出しであり、臣下から娶れば妻の経費は実家から国庫への歳入となる。朝廷は皇子が多すぎると臣籍降下させるくらいだから、王家から帝が妃を迎えるのは負担が大きいのだろう。だから特に帝が召す場合を除けば、「人を選びて」は<臣下から婿を選んで>王家の権威を売ったワケだ。この文は、多分そうした朝廷の台所事情に対する院と殿との共通認識を下敷きにしているのだろう。でなければ、この言葉上だけでは、何を言っているのか分からない文だ。

ましてかく(まして私のようにこうして)、今はとこの世を離るる際にて(いよいよ仏門修行に入るといふ時に)、ことごとく思ふべきにもあらねど(ことを構えるような事は考えるべきではないが)、また(しかし)、しか捨つる中にも(出家して俗世を捨てるにも)、捨てがたきことありて(気懸かりなことはあって)、さまざまに思ひわづらひはべるほどに(様々に思い悩む内に)、病は重りゆく(病は重くなります)。また取り返すべきにもあらぬ月日の過ぎゆけば(無為に月日が過ぎて)、心あわたたしくなむ(気が急ぐばかりです)。

かたはらいたき譲りなれど(恐縮な依頼ですが)、このいはけなき内親王、一人(この母御に死に別れた幼い三の宮一人は)、分きて育み思して(特に目を掛けていただいて)、さるべきよすがをも(頼るべき夫たる適任者を)、御心に思し定めて預けたまへ(あなたの判断で決めて姫宮の世話をその適任者に任せて下さい)、と聞こえまほしきを(とお願い申し上げたいのですが)。「かたはらいたき譲り」は注に<以下、女三の宮を源氏に降嫁させるべく話を切り出す。内親王の降嫁を「譲り」と表現する。>とある。尤も、言い回しは実に回りくどい。先ず「ゆづり」だが、是は直接は「分きて育み思して」に掛かり、その限りでは<親権委譲>を意味する。その上で、「さるべきよすがをも(然るべき頼り先に付いても)御心に思し定めて(あなたに御判断頂いて)預けたまへ(委託して下さい)」という言い方で、娘の結婚相手を自分に代わって決めてくれ、という<委任の委譲>になっている。是が、権威ある朱雀院にして、弟院に娘を妻として委ねる切実な親心の示し方、ということらしい。

権中納言などの独りものしつるほどに(権中納言が独り身でいた時に)、進み寄るべくこそありけれ(彼に話を持って行くべきだった)。*太政大臣に先ぜられて(藤原殿に先を越されて)、*ねたくおぼえはべる(失敗したと思っています) *「太政大臣」は「おほいまうちぎみ」と読みがある。「まうちぎみ」は古語辞典に「公卿」と表記され「まえつぎみ」の音便とある。「前つ君」は<御前貴人=大臣>で、その「おほい(大=上席)」者は<太政大臣>ということか。 *「ねたし」は事態自体の推移や意味とは別に、自分にとってその事態が<不都合だ>という気持ち。理屈で言えば、このダメ出しが源氏殿に三の宮との婚儀を迫る、という意味になる。内親王の臣下との婚儀は出来れば避けたい。が、入内は諸般の事情が許さないらしい。その上で、院は源氏殿に「さるべきよすがをも御心に思し定めて預けたまへ」と依頼した。その「さるべきよすが」とは源氏君である権中納言なることは自明だ。それが<不都合>という消去法では、責任を託された源氏殿に残る解は<自分で責任を取る>というワケだ。

と聞こえたまふ(と申されます)。

「中納言の朝臣(中納言のヤツは)、まめやかなる方は(マメな方は)、いとよく仕うまつりぬべくはべるを(もう良く勤め上げまするが)、何ごともまだ浅くて(何せ経験不足で)、たどり少なくこそはべらめ(配慮が行き届かないでしょう)。

*かたじけなくとも(畏れながら)、*深き心にて後見きこえさせはべらむに(姫宮を大事に考えて後見させて頂きますので)、*おはします御蔭に変わりては思されじを(こちらにいらっしやって院の御庇護にあることに変わるようには姫宮は御思い為さらないでしょうが)、ただ行く先短くて(ただ私の寿命も長くはないので)、仕うまつりさすことやべらむと(御仕えが中止となることがないだろうかと)、疑はしき方のみなむ(懸念される所が)、心苦しくはべるべき(気懸かりです)」 *「かたじけなし」は語感が分からない語だ。意味は<畏れ多い、勿体ない、有難い>だろうし、死語に近いが冗談風には今でも稀には使う。ところで、大辞泉には「かたじけあり」という語が<かたじけなし>。 「かたじけなし」をふざけて言った語。元禄(1688~1704)のころの遊里ではやった。>と説明されている。近世でも冗句になっていたということは、この「なし」は<否定の「無い」>ではなく<形状助詞の「成す」>の意のように思われる。だからこそ、その「なし」を文字って「有り」と言い換えて遊んだ、ということだろう。意味は「かたじけあり」でも<かたじけなし>なのだから。となると、「かたじけ」とは何か。どうせ定説は無いようだから勝手に考えてみる。「かたじけ」は「かたじく」という形容動詞の一定状態を示す言い方に見える。「かたじ」は「かつ(克つ、抑える・制御する)」の未然形に否定の助動詞「じ」が付いたもので、辺り憚らず<感情を抑えられない>という言い方だと仮定する。と、「かたじけ」は<冷静ではない状態>となる。と、「かたじけなし」は<冷静ではない状態で物を言うので失礼かも知れないが、有難く思う>みたいな気持ちの慣用句だ、と一先ず捏ねた。どうして、此处でこんな言葉遊びまでして呼吸を溜めるかと言うと、源氏殿が此处で一気に結論を出してしまったように見えるからだ。いや、この見舞いの場面になること自体にそうした推移は既に仕込まれてはいるのだろうが、この「かたじけなくとも」の一言で事態が急変するという舞台演出を私なりに味わって置きたい、という欲張りだ。 *「深き心にて後見きこえさせはべらむ」の主語は源氏、と注にある。「はべらむ」は謙遜語だ。そして、これこそが受諾の言葉だ。 *「おはします御蔭に変わりては思されじ」の主語は三の宮だ。

と(と源氏殿は)、受け引き申したまひつ(三の宮との婚儀を引き受け申しなさったのです)。

[第八段 朱雀院の饗宴]

夜に入りぬれば(夜になると)、主人の院方も(あるじのゐんかたも、朱雀院の事務高官諸氏も)、客人の上達部たちも(まらうとのかんだちめたちも、源氏殿に供奉してきた上級貴族たちも)、皆御前にて(皆同席を許されて)、御饗のこと(おんあるじのこと、接待料理が振舞われ)、精進物にて(しゃうじものにて、肉魚を使わない精進料理なので)、うるはしからず(豪勢ではなく)、なまめかしくせさせたまへり(品良く調えられていました)。

院の御前に(ゐんのおまえに、朱雀院のお膳には)、*浅香の懸盤に御鉢など(白木のお盆に鉢一つという粗末さで)、昔に変わりは参るを(昔とは変わった様子で食事なさるのを)、人びと(列席者たちは)、涙おし拭ひたまふ(涙を押し拭いなさいます)。*あはれなる筋のことどもあれど(院の御出家姿に世の無常を感じ入った歌の唱和などもありましたが)、*うるさければ書かず(でしゃ

ばることになるので書きません)。*「浅香の懸盤」は「せんかうのかけばん」と読みがある。「浅香」はく香木の一。沈香(じんこう)の若木で、材質は白く粗いもの。>と大辞泉にある。「懸盤」はく膳の一種で食器を載せるもの。四脚の台の上に折敷(をしき、お盆)を乗せるようにしたことから、その名を得たが、後には脚を作り付けるようになった>と古語辞典に図示してある。「御鉢(みはち)」は食器としての鉢だろうが、以前に修行僧のテレビ番組で漬物少しを乗せた白米の鉢一つの他にはおかずも何も無い粗食で食事していたが、まさか其処までではないだろうが、普段の院の食事と比べれば鉢一つに見えるほどの粗食だったかも知れない。*「あはれなる筋のこともあれど」はくしみじみとした和歌が詠まれたが>と訳文がある。「筋」はく系統>であって直ちにく歌筋>を意味しない。一般に、饗宴列席者の心構えとして、客人が主人の心境に共感を示す、ことが礼儀なのは今日でも同じだが、当時はその方法が歌詠みという形だった、ということなのだろう。そういう常識で読めば「ことも」がく和歌の唱歌>になる、ということらしい。つまりは場の描写だ。*「うるさければ書かず」は注にく『細流抄』は「草子地也」と指摘。『集成』は「語り手の女房の言葉の体」。『完訳』は「語り手の省筆の弁」と注す。>とある。この場の出席者は貴人ばかりだから、それらの歌を「うるさし」などと女房が口を出せる筈もない。この「うるさし」は語り手自身がく女のクセにでしゃばって煩くなる>ことを憚った。少なくとも、そういう言い方だ。しかし名作、この場を象徴できるような一句、があれば、その披露は詠み手、この場だけに引っ張り出す高官名が面倒だとしても、に対して名誉であり僭越にはならず、より立体的な場面描写になるだろうから、やはりどうしても、儀礼的な平凡な歌ばかりだったような印象は受ける。

夜更けて帰たまふ(夜更けてから六条院はお帰りになります)。祿ども(供奉の者たちは記念品を)、次々に賜ふ(次々に賜わります)。*別当大納言も御送りに参りたまふ(朱雀院の別当である藤大納言もお見送りで六条院まで付き従います)。主人の院は(朱雀院は)、今日の雪にいとど御風邪加はりて(この日の雪にひどく風邪をこじらせて)、かき乱り悩ましく思さるれど(発熱に苦しんでいらしたが)、この宮の御事(姫宮のことを)、聞こえ定めつるを(六条殿に頼み収めたのを)、心やすく思しけり(安心に御思い為さいました)。*「別当大納言」は注にく朱雀院の別当。かつて女三の宮の降嫁を望んだ一人。>とある。「祿ども次々に賜ふ」に続いて述べられるこの一文で、別当と源氏殿の格の違いを示しているのだろうか。王家と臣下との差を際立たせている、ということかも知れない。